

造形・美術教育における教員研修に関する実態と課題：教科教育とデザインおよび彫刻領域との連携による研修を通して

著者	橋 智子, 川原 知洋, 名倉 達了
雑誌名	静岡大学教育実践総合センター紀要
巻	28
ページ	307-315
発行年	2018-02-28
出版者	静岡大学教育学部附属教育実践総合センター
URL	http://doi.org/10.14945/00024687

造形・美術教育における教員研修に関する実態と課題

- 教科教育とデザインおよび彫刻領域との連携による研修を通して -

高橋智子* 川原崎知洋* 名倉達了*

A practical study on the actual situation and problems on teacher training in art education

- Through training in collaboration with teachers of art education, design and sculpture-

Tomoko TAKAHASHI Tomohiro KAWARASAKI Tatsunori NAGURA

【要旨】

近年、社会の急速な変化に伴い、学校が抱える課題は複雑化・困難化していると指摘され、教員の資質能力の向上などが緊急に求められている。平成 27 年に文部科学省から出された答申では、「研修」「採用」「養成」の視点から、これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について、課題が指摘されている。本研究では対象を本学の卒業生とし、卒業生の採用後の教科（図画工作科および美術科）に関する研修のあり方を探ることを目的とする。大学での学びと研修の連続性を意識しながら、現場における研修のあり方を検討することを目指す。本稿では、本年度、試験的に実施した卒業生対象の研修会の報告を行うとともに、研修後に実施したアンケートから、現場での図画工作科や美術科の研修に関する実態、研修を通して得た学びや今後の学びのニーズ等を分析する。分析した結果を基礎データとして、今後の研修改善の一助とする。

【キーワード】 造形・美術教育 教員養成 教員研修 デザイン 彫刻

1. 研究の背景

近年、社会の急速な変化に伴い、学校が抱える課題は複雑化・困難化していると指摘され、教員の資質能力の向上などが緊急に求められている。平成 27 年に文部科学省から出された答申では、「研修」「採用」「養成」の視点から、これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について、課題が指摘されている。とりわけ、現職教員の資質能力向上のための研修のあり方については、研修制度の見直しの必要が指摘されると共に、学び続ける教員を支えるキャリアシステムの構築が求められている。現職研修の改革としては、継続的な研修のあり方や校内での研修に対する支援の充実、大学などとの連携による継続的な研修の推進などが具体的方策としてあげられている¹⁾。

また、平成 29 年 8 月には「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて - 国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議報告書 -」が公表され、その中で、国立教員養成大学・学部の教員養成・研修の機能を強化や教員養成の質の向上を担っていく観点から、これまでの取組の課題や対応策などがとりまとめられた²⁾。このような現状を踏まえ、教員養成系の大学には自大学・学部の課題や特色をいかした対応が求められており、上記の報告書には、今後、教員養成系の大学・学部が、教員養成の機能のみならず、現職教員の教育・研修の

機能も強化していく必要性が示されている。

2. 大学・大学院との連携による教員研修の実態

文部科学省は教員研修（初任者研修、10 年経験者研修等）について、実施状況調査を継続的に実施している³⁾。平成 27 年度の調査の中で、「研修のあり方」が取り上げられており、その中で「大学・大学院との連携」が項目としてあげられている。大学・大学院と連携して研修を実施している教育委員会等は、「初任者研修」では 82、「10 年経験者研修」でも 82 であることが報告されている。本データに関して、HP より閲覧可能であるもっとも古い調査（平成 19 年度）においては、大学・大学院と連携している教育委員会等は、「初任者研修」では 36、「10 年経験者研修」では 75 であった。平成 19 年度と平成 27 年度の調査を比較すると、全体として連携による研修の実施が増加傾向であり、「初任者研修」では倍以上に伸びていることがわかる。

平成 27 年度の調査では、連携のあり方として最も多いのが、「校内研修・校外研修への講師派遣」であることが指摘されている。また、近年では大学・大学院と連携し「研修教材等の作成」、「大学が開設する講座等を校外研修の一部として活用」、「研修内容の企画・立案（全体的な研修プログラムの共同作成等）」する等、研修への講師派遣という連携のあり方だけで

*教育学領域 美術教育系列

はなく、各教育委員会において様々な工夫を行い、そのあり方を模索していることがわかる。

3. 先行研究の動向

造形・美術教育における教員研修に関する先行研究は、近年、いくつかみられる。まず、降旗（2012、2015）は研究対象を小学校および中学校の教員とし、図画工作科や美術科における研修機会や経験の少なさを課題として指摘すると共に、限られた研修機会において実践的な教育力向上を目指すべく研修の要素と内容の考察を行っている^{4) 5)}。それらを踏まえ、研修の目的達成のために有効な教員研修システムの構築を目指している。教員研修における重要な要素として、Reconsideration（教育実践の振り返り）、Consideration（問題点と課題の考察）、Solution（課題の解決・解消の考察）、Improvement（教育実践の具体的改善）の4つの要素と具体的な内容を示している。これをRCSI教員研修システムとして提案するとともに、ベテラン教員の学びに対する有効性に関して課題も提示している。さらに、インターネットを活用した研修のあり方などの可能性についても言及している。

次に、隅（2015）は20歳代と50歳代の教員を対象に聞き取り調査を実施し、図画工作科の教科観等の相違点を分析すると共に、教員養成の果たす役割について考察している⁶⁾。図画工作科指導の充実を図るためには、現職教員に対して教科観を変換するような研修のあり方を模索することや教員養成段階では指導理論はもとより材料および用具の扱い方等について丁寧な指導を行う必要性を示している。

先行研究では、造形・美術教育における研修のあり方をハード面とソフト面から探るものや、教員養成の果たす役割との接点から研修のあり方を考察するもの等があることがわかる。図画工作科や美術科を専門とする教員は、どの校種においても授業づくり等について相談できる専門教員が同学校に少ない状況にある。こうした状況の中、現職教員の学びの場である研修のあり方に関して、その学びの可能性を探ることは緊急の課題であるといえる。

先行研究では、研究対象を教員養成課程の卒業生や修了生（以下、卒業生とする）に限定したものではなく、幅広く現職教員を対象としている。しかし、今後、教員の養成・採用・研修の連続性が一層求められている中で、各大学が卒業生に対して、教科の専門性を高めたり、授業力を向上したりするような研修のあり方を模索・検討することが必須の課題になってくると考えられる。

4. 研究対象および目的

本研究では対象を本学の卒業生とし、卒業生の採用後の教科（図画工作科および美術科）に関する研修の

あり方を探ることを目的とする。大学での学びと研修の連続性を意識しながら、現場における研修のあり方を検討することを旨とする。

本稿では、本年度、試験的に実施した卒業生対象の研修会の報告を行うとともに、研修後に実施したアンケートから、現場での図画工作科や美術科の研修に関する実態、研修を通して得た学びや今後の学びのニーズ等を分析する。分析した結果を基礎データとして、今後の研修改善の一助とする。

なお、今回は研修の参加者を若手教員（5年未満）と中堅以上教員（5年以上）にわけ、それぞれの視点から分析を進めていき、さらなるニーズの分析につなげたい⁷⁾。

5. 研修の概要

本学卒業生を対象とした教科に関する研修については、これまで本学の美術教育の教科教育および教科専門の教員が連携を行い開催したことはほとんどなく、本年度が初めての取り組みとなった。母校での研修実施のお知らせは、メーリングリストやSNSを活用し情報を流した。結果、当日は17名の参加があった⁸⁾。以下に、本年度実施した研修会（「図画工作科・美術科教育研修会2017」）の詳細を報告する⁹⁾。

（1）研修目的

本研修の目的は、①図画工作科・美術科の教員として専門性を高めること、②図画工作科・美術科の授業力を高めること、③日頃の授業実践を振り返り、自身の成果や課題を整理すること、④新たな授業づくりのヒントを得ること、の4点とした。

（2）日時および場所

日時と実施場所は以下の通りである。現職教員が参加しやすいように、夏休みの休日に設定し、午前と午後とで実施した。

日時：平成29年8月21日（月・祝）9：30～17：00

場所：静岡大学教育学部G棟001号室

（3）研修担当

本研修では、参加者の造形・美術教育の学びの広がりを期待して、教科教育と教科専門の担当教員との協働で実施した。教科教育においては、教科の意義や目標、新しい学習指導要領の改訂に関する内容について講義を行い、教科専門（デザインおよび彫刻）では、各領域の専門知識や内容について、最新の話題を中心として、講義を行った。

（4）研修内容

研修内容は、教科教育と教科専門（デザインおよび彫刻）の内容やグループによる交流会を実施した（写真1～4）。教科専門と教科教育については、いずれも講義を実施した。交流会では、参加者が自身の実践を持ち寄りグループ内で発表すると共に、実践の成果と課題について考察した。その後、全体でグループ

のまとめについて発表を行った。当日のスケジュールは以下の通りである。

9:00～9:30	受付
9:30～9:45	オリエンテーション
9:45～10:45	講義1 デザイン
10:45～10:55	休憩
10:55～11:55	講義2 彫刻
11:55～13:00	昼食
13:00～14:00	講義3 美術教育
14:00～14:15	休憩
14:15～14:30	グループ交流会
14:30～15:30	実践交流
15:30～16:30	学びや課題の共有

(高橋智子)



写真1 講義の様子



写真2 交流会で各自の実践をもとに意見交換している様子



写真3 交流会で授業づくりの成果と課題を整理している様子



写真4 交流会でグループ毎に全体発表している様子

①講義1 デザイン領域の内容について

「生活の中のデザイン」をテーマとして、講義を行った。我々の生活の中に存在する様々なデザイン事例を取り上げ、これからの時代においてデザイン領域として考えていかななくてはならないポイントについて話題提供した。昨今ではデザインという言葉が市民権を得たことでその意味は広義となった。このような背景から、本講習では現状の社会で求められているデザインと、図画工作科及び美術科での展開について共有することを目的とした。

講義ではまず、JDP（公益財団法人日本デザイン振興会）の公式HP上に公開されている「デザインの考え方」を端緒に、デザインという言葉の捉え方について確認した。デザインは美術・芸術領域の中にある表現領域という位置付けにあることから、デザインもまた「自己表現の領域」であると一般的に捉えられてしまっている現状があること。さらに、「デザイン＝表層的な装飾」というような狭義な意味で認識されてしまっている現状があることなどを把握した。

次に、webデザインやサービスデザインの分野で注目されている人間中心設計（HCD/Human Centered Design）の考え方を具体的な事例（スターバックスコーヒーのサービス戦略／寿司のパッケージ／Drop Rest Mug／Adjust Mug／解放シート）を紹介・解説し、デザインのアイデア発想は色・形などの見た目からのみではなく、人間の認知・行動に基づいてデザイン提案することの重要性について伝えた。

何かをデザインする際、そのデザインを必要としている対象者を明確にし、デザインする対象（モノ・コト）について深く考察し、その本質的な部分に迫ることによって問題を解決するというプロセスが必須であると思われる。このような根本的な問題解決を遂行するためには、広い視野で物事を見つめ直し、捉え直す力が求められる。また、創造的な問題解決に加え、日常生活の中で問題を発見する力も必要とされている。以上のポイントを押さえた上で教材開発することが教員には求められることを確認した。（川原崎洋洋）

②講義 2 彫刻領域の内容について

「アートの世界：過去・現在・未来」をテーマとして講義を行った。アートの新たな潮流であり、更なる発展が予想される「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」（以下、SEA）について情報提供した。

参加や対話に重点を置き様々な分野の知見を活用したプロジェクトを立ち上げ、社会と深く関わりながら実質的な変革を目指す SEA は近年欧米で盛んに繰り広げられ、アートのひとつの可能性を示すものとして注目されている。しかしながら我が国においてこの動向が一般に知られているとは言い難く、本講義では SEA の活動の一端を伝えることを目的とした。

はじめに、平成 28 年 2 月から 3 月にかけて都内のアーツ千代田 3331 で開催された『ソーシャリー・エンゲイジド・アート展 社会を動かすアートの新潮流』の参加アーティストをピックアップし、出品作品や活動内容を紹介した。本展が日本で初めて SEA を本格的に紹介する試みであり SEA の概念自体も構築の途上にあること、加えて美術教育と深く関わる動向であることから今後の展開に注目する必要性を示した。

次に、SEA の系譜の原点にあると考えられる 20 世紀初頭にヨーロッパで始まったアヴァンギャルドや、著しい拡大へと繋がった 60 年代末のポスト・ミニマリズムについて彫刻や立体作品を介して説明した。彫刻をイメージの立体的な具現化という概念のみで捉えていると SEA との関係性を想起することは難しいが、現実空間と相互に影響し合う彫刻は本質的に社会との関係という課題を内包してきた。こうした観点によって SEA の系譜を俯瞰することで、現代の多様性を極める彫刻表現への理解も深まるのではないかと提言した。

最後に、世界と比較し安定した社会状況の日本では、SEA のプロジェクトの必然性や質を保つことが容易ではない旨を指摘した。ただし、技巧的な上手さや表面的な美しさではなく他者とのコミュニケーションや相互理解を重視する SEA は、これまで以上にアートの新たな可能性を示しており、美術教育における教材への応用も期待されていることを伝え結びとした。

(名倉達了)

③講義 3 教科教育の内容について

「造形・美術教育の意義と魅力の理解」をテーマとし、講義を行った。今年度、新たに改訂された学習指導要領を取り上げ、改訂のポイントを説明した。特に、図画工作科・美術科としての学びを資質能力の側面から整理されたことを含め、今日的な課題を踏まえながら構造化された今期のポイントを押さえた。加えて、過去の学習指導要領にも触れながら、現在使用されている教科書の内容との比較等を通して、今期の改訂に伴う教科目標や内容の理解を深めた。さらに、子どもの表現に関する作品等を提示し、表現および鑑賞の学びの特徴やその魅力に迫ると共に、造形・美術教育の

意義や可能性について確認した。

④グループ交流会の内容について

「図画工作科や美術科の教員と交流し、自身の実践を振り返り成果と課題を理解すること」をテーマとして、交流会を実施した。先述してきた①～③の講義のみならず、交流会を設けたのは、日頃感じている現場での実践の課題や悩みなどをお互いに共有する場を設けたいと考えたためである。図画工作科や美術科を専門とする教員は、各学校において複数在籍する 경우가少なく、課題や悩みを共有する機会も少ない。

交流会は、参加者を 4 グループにわけて実施した。グループ毎に簡単に自己紹介（1 分程度）を行った後、各自（全員）の持ち寄った実践について発表を行った。発表後、質疑応答や感想を交流する時間を設け、その後、授業づくりについて学んだことや考えたこと、課題などについて交流した。共有の方法として、付箋紙を使用した。まず、個人活動としてピンク色の付箋に「学びや成果」を記入し、青色の付箋に「課題」を記入し、その後、グループメンバーと付箋を見せ合いながら、学びや成果、課題をカテゴライズし共有した。各グループで出た意見は、全体発表を行い、最終的には全体で共有する時間を設けた。

6. 参加者へのアンケート調査

研修後、参加者を対象として、造形・美術教育における教員研修の実態把握と、本研修を通して得た学びや今後の学びのニーズ等を分析するためにアンケートを実施した。

(1) 調査対象

研修に参加した 17 名を対象とした。

(2) 調査時期

2017 年 12 月～1 月

(3) 調査方法

自記式質問紙（選択・自由記述方式）調査。研修後、メールでアンケート調査用紙を参加者へ送信した。アンケートの回収は、メール又は FAX にて行った。回収率は 100%であった。

(4) 分析方法

アンケートの調査項目について、回答のあったすべてのデータを集計した。

7. アンケート結果および考察

(1) 参加者について

①年齢について

参加者 17 名のうち、20 代は全体の 65%、30 代は 29%であり、50 代が 6%となっている。今回の研修では、20 代の参加者が最も多く、卒業して 8 年以内の卒業生の参加率が高いという特徴がみられた。

②参加者の勤務地域について

参加者の勤務地域については、静岡市が 29%、静

岡県東部が 24%、静岡県西部と浜松市が 18%、その他が 12%であった。「その他」の内訳は、県外からの参加者（1名）と学校に勤務していない参加者（1名）であった。全体として、静岡県、静岡市、浜松市の幅広い地域からの参加があったが、開催場所となった静岡市を勤務地とする卒業生の参加が最も多い傾向にあった。ただ、県外からの参加があったり、都合上参加が難しいが都合が合えば参加したかったという声も聴いたりした。

③出身大学および学科について

出身大学については、静岡大学を卒業した参加者が 94%であった⁸⁾。美術科が 53%、修士課程美術科が 24%、美術科以外の学科が 18%であった。大学院（美術）を修了した参加者（24%）は、全員、同大学の美術科を卒業していた。美術科以外の学科を卒業した参加者は、現在勤務している小学校で図画工作科を担当していたり、教職大学院に在籍し図画工作科の研究を進めていたりしたため、研修への参加を希望した。

④勤務年数について

勤務年数については、5年未満が 53%、5年以上10年未満が 24%、10年以上20年未満が 18%、30年以上が 6%であった。全体として、20年未満の参加者が多かった。特に、5年未満の参加者が過半数を占めていることが特徴としてあげられる。この結果から、勤務年数が低い卒業生が本研修に積極的に参加していることがわかる。本稿では、分析対象となる「研修の経験」や「研修での学びや今後期待すること」に関して、5年未満の参加者を「若手」、5年以上の参加者を「中堅以上」と分類し、分析を進めていく。

⑤勤務校種について

勤務校種については、小学校が 53%、中学校（美術）が 24%、高等学校（美術）12%、特別支援学校 6%、その他が 6%であった。「その他」は、専門学校勤務であった。全体として、小学校勤務の参加者が過半数を占めている状況であった。近年、小学校の教員としての採用が増えている傾向にあるため、参加者の校種を把握した上で、研修内容を検討するなどの視点が必要となる。

⑥研修の参加について

本研修への参加については、「全講義（美術教育、デザイン、彫刻）、交流会」に参加したのは 76%であった。その他が 24%であった。「その他」としては、「全講義（美術教育、デザイン、彫刻）のみの参加」、「講義（美術教育のみ）への参加」、「講義（デザインおよび彫刻）のみの参加」、「講義（美術教育のみ）と交流会への参加」があげられた。本研修は、午前から午後にかけて設定したが、7割をこえる参加者がそのどちらにも参加している結果となった。

（2）研修経験や機会について

研修の経験について、若手と中堅以上でその傾向を

比較していく。研修の経験について、その有無を調査した。

若手については、「研修に参加したことがある」と回答したのは 67%であり、「参加したことがない」と回答したのは 33%であった。研修の参加回数としては、1回が 50%、5回以上が 33%、3回が 17%となった。参加経験のある研修（複数回答可）は、「勤務している学校内の校内研修」、「地区の教科研修会」、「個人的な研究グループによる研修会」、「学会等が主催する研修会」が各 33%、「教育委員会や教育事務所が主催する研修会」が 17%であった。「参加したことがない」と回答した参加者の理由としては、「必要あるが機会がない」、「必要あるが忙しいなどで参加していない」「その他」があげられた（33%）。若手では、7割近くが研修に参加していると回答している。ただし、参加回数としては、1回が過半数を占めていることが分かる。

中堅以上については、研修に参加したことがあると回答したのが 100%であった。研修への参加回数としては、5回以上が 75%、2回が 13%、1回が 13%となった。参加経験のある研修（複数回答可）は、「学会等が主催する研修会」が 88%、「地区の教科研修会」が 75%、「個人的な研究グループによる研修会」が 63%、「教育委員会や教育事務所が主催する研修会」が 50%、「勤務している学校内の校内研修と大学が主催する研修会」が 38%、「その他」が 13%であった。中堅以上では、全回答者が研修に参加したことがあると回答しており、参加回数も5回以上が圧倒的に多い。これは勤務年数が増えれば、自然と研修の機会も多くなるためだと考えられる。ただ、若手と中堅以上が参加した研修をタイプ別にみると、中堅以上の方が自主的に参加するタイプの研修（上記下線部）に多く参加している傾向にあり、若手は若干ではあるが参加が義務付けられている研修への参加が多い傾向にあった。

研修を受ける機会については、若手は「あまりない」が 44%で最も多く、中堅以上は 25%に留まっている。特に、若手に関しては「研修を受ける機会がない（「あまりない」「全くない」「わからない）」が 66%と高くなっている。若手の場合は、正規採用ではなく臨時や非常勤講師として働いている場合も多く、正規採用の教員に比べて研修の機会が少ないこともその理由のひとつとしてあげられる。事実、本アンケートの自由記述の部分で、「非常勤講師の身としては、交流会で他の美術の先生とお話ができたことがかなり有り難かったです。」という意見があげられた。美術教育の場合、中学校や高等学校で臨時講師や非常勤講師として勤務する機会も多いため、こうした若手の勤務形態の卒業生に対して研修の機会提供も考えていく必要があるといえる。

(3) 研修の必要性について

研修の必要性については、若手も中堅以上共に「とても必要である」「必要である」と回答している回答者が100%となった。若手と中堅以上を問わず、研修のニーズが高いといえる。ただし、「授業づくりで困った際、どのように対応しているか」（複数回答可）の回答では、若手で「研修に参加する」という回答が33%、中堅以上で25%となっており、普段の授業課題の解決と研修への参加が直結していない可能性が示唆された。この回答で高い値を示したのが、若手では「教科書・指導書や資料集を参考にする」「Webの情報を参考にする」が78%、次いで「市販されている図書や出版物を参考にする」が67%であった。中堅以上では「市販されている図書や出版物を参考にする」が100%となっており、次いで「他校の同教科の専門教員に相談する」「教科書・指導書や資料集を参考にする」「Webの情報を参考にする」「学習指導要領を参考にする」が75%であった。若手も中堅以上も図書や教科書等を参考にしていく傾向にあり、特に若手は、同教科の教員への相談は低い値（33%）を示している。授業での課題解決のために、教員への相談よりも書籍などを用いて授業課題に向き合う若手の姿がみえてくる。また、若手に特徴的な回答に「大学時代の講義ノートを参考にする」（33%）があげられた。

(4) 研修での学びと今後期待すること

本研修の満足度は、全体で「とても満足している」「満足している」をあわせて100%であった。満足度は高かったといえるが、アンケートを基に、参加者が研修から「学んだことや今後期待すること」（複数回答可）について、考察を行う。

①研修全体について

本研修で学んだこととして、若手では「教科の課題や可能性」が78%、「教科の特性や意義」が56%、「題材開発及び研究力」「学習指導要領の動向」「授業づくり」が44%となった。本研修に今後期待することとしては、「題材開発及び研究力」が78%と最も高くなっており、次いで「題材づくり（演習）」が67%となっている。中堅以上では「教科の特性や意義」「学習指導要領の動向」が75%、「教科の課題や可能性」「各領域の最新情報」「他校種・同教科教員の授業観」が50%と続いた。今後期待することでは、「題材開発および研究力」が88%、「各領域の専門的な知識」が63%となっている。

若手も中堅以上も今回の研修において、授業づくりの基礎となる教科の可能性や課題、教科の特性や意義に学びが深まっていることが分かる。それを踏まえ、今後はより実践的な題材開発や研究について深めたいという欲求が高まっていると考えられる。

②講義1 デザインについて

デザインの講義を通して学んだこととして、若手で

は「各領域の専門的な知識」「教科の社会的・文化的価値についての理解」「各領域や教科の課題や可能性」「各領域や教科の特性や意義」が75%と高い値を示した。今後期待することとしては、「題材づくり（表現の実技）」「子ども理解」「各領域・教育の目標理解」が75%となっている。中堅以上では「各領域の専門的な知識」が86%、「各領域や教科の課題や可能性」「各領域や教科の特性や意義」「各領域・教育の最新の情報」が43%となっている。中堅以上では、専門的知識に関する学びが突出して高い値を示した。今後期待することとしては、「題材づくり（表現の実技）」が86%、「題材づくり（鑑賞の実技）」が71%となっている。本研修では、実技の内容を設定していなかったため、若手と中堅以上共に実技を通した題材への学びに対する期待が高まっているといえる。専門的な知識の獲得だけではなく、それを活用すること（題材化）を求めている傾向であるといえよう。

③講義2 彫刻について

彫刻の講義を通して学んだこととして、若手では「各領域の専門的な知識」が88%、「各領域・教育の最新の情報」「各領域や教科の課題や可能性」が75%と高い値を示した。今後期待することとしては、「教具の工夫」「題材づくり（鑑賞の実技）」「題材づくり（表現の実技）」「指導方法」「各領域や教科の授業づくり」が75%となっている。中堅以上では「各領域の専門的な知識」が57%、「各領域や教科の特性や意義」が43%となっている。今後期待することとしては、「題材づくり（鑑賞の実技）」「題材づくり（表現の実技）」が71%、「関連書籍および先行研究の紹介」が57%となっている。先のデザインと同様、若手と中堅以上共に実技を通した題材への学びに対する期待が高まっているといえる。専門的な知識の獲得だけではなく、それを活用すること（題材化）を求めている傾向はデザインと同様であった。また、彫刻では授業過程における指導の在り方について学ぶことも期待されていることがわかる。

④講義3 美術教育について

美術教育の講義を通して学んだこととして、若手では「各領域や教科の課題や可能性」が75%、「各領域・教育の内容理解」「各領域・教育の目標理解」「各領域や教科の特性や意義」が63%であった。今後期待することとしては、「各領域や教科の授業づくり」が75%、「他教科・他機関との連携」「環境整備」「関連書籍および先行研究の紹介」「学習評価」「指導方法」「題材開発および研究」が63%となっている。中堅以上では「各領域・教育の目標理解」が100%、「各領域・教科の最新の情報」が88%、「各領域・教育の内容理解」が75%、「各領域や教育の特性や意義」が63%となっている。今後期待することとしては、「題材づくり（鑑賞の実技）」は63%、

「題材づくり（表現の実技）」「各領域や教科の授業づくり」が50%であった。美術教育の講義では、授業づくりおよび関連する具体的な指導事項等への学びに対する期待が高まっている。中堅以上においては、デザインと彫刻と同様、実技を通した題材への学びに対する期待が高まっていることがわかる。目標や内容の理解を押さえ、それらを活用すること（題材化）を求めていることも、デザインと彫刻と同様である。

⑤グループ交流会について

交流会を通して学んだこととして、若手では「他者の教育観」が86%、「他者の実践の成果と課題」が71%と続いた。今後期待することとしては、「学習形態」「環境整備」が71%となっている。中堅以上では「他者の実践の成果と課題」「他者の教科観や授業観」が86%、「自身の実践の成果と課題」「他校種の教科観や授業観」が71%となっている。今後期待することとしては、「他教科・他機関との連携」が71%、「他者の実践の成果と課題」が57%であった。若手については、自身の実践から学びを得るというよりも、他者の実践からの学びを重視している傾向にあるといえる。中堅以上においては、他者だけでなく自身の実践とも向き合う余裕があるといえる。また中堅以上では、今日的な課題を意識した上で、今後の研修への期待感が高まっているといえる。

(5) 今後の研修への参加意欲について

本研修が再び実施されたとしたら、研修へ再度参加したいかという意欲に関する質問を行った。参加者全員が「参加したい」と回答した。

(6) 研修実施時期およびスタイルについて

研修の実施時期（複数回答可）は、「長期休み（夏）」が100%、「土日祝日」が41%、「長期休み（春）」が35%、「長期休み（冬）」が29%、「平日の夜」が6%であった。研修の実施時期として、長期休みの中でも、夏休みを希望している参加者が多いことが明らかになった。研修のスタイルとしては、「講義と実技と交流会」が71%、「講義と実技」が29%となった。どちらにしても、講義で得た最新の知識などを、実技を通して活用すること（題材化）が求められていると考える。

(7) 研修内容について

実施する研修内容（複数回答可）としては、「美術教育」は100%、「絵画」が82%、「デザイン」が76%、「彫刻」が71%、「工芸」「映像メディア」が53%、「美術史」が41%、「美学」が29%となった。美術教育（理論）をベースとし、学習指導要領に示されている各領域（教科専門）について学びを深めていくことを期待していると考えられる。

(8) 実施場所について

実施場所としては、「静岡大学」が82%、「駅周辺の施設」が65%、「美術館」53%、「静岡大学学

校園」「公民館」が18%であった。本研修では、静岡県下より参加があった。研修へのさらなる参加を促すには、参加しやすい場所を設定した方が良いと判断したため、本質問を設定した。結果、静岡大学での実施を希望する参加者が多いという傾向となった。

(9) 実施回数と時間について

実施回数としては、「単発的な実施」が76%、「継続的な実施」24%となった。実施時間は、本研修と同様に1日実施（午前・午後）が53%、半日実施が47%であった。単発的な実施が継続的な実施を上回っているが、アンケートの自由記述欄では「定期的に研修が行われるとよいと思います。交流会をメインに、その話題に沿った講義や演習ができるとうよいと思います。」という記述がみられた。一方で、「定期的に研修があると有難いのですが、部活等で全ての研修会に参加できる自信がないので、単発でも参加しやすい研修会があると有難い。」という記述もみられた。現職教員の実務内容を把握した上で、研修のあり方を探っていく必要もあるだろう¹⁰⁾。

8. 結語

本研究では、本学の卒業生を対象として、教員採用後における教科に関する研修のあり方を探ることを目的とした。本稿では、本年度、試験的に実施した卒業生対象の研修会の報告を行うとともに、研修後に実施したアンケートから、図画工作科や美術科の研修に関する実態、研修を通して得た学びや今後の学びのニーズ等の分析を行ってきた。

研修においては、ハード面とソフト面からの検討が必要であると共に、参加者の実態にあった計画や内容を検討する必要がある。本稿で分析したように、若手と中堅以上では、研修における学びの共通性や相違性がある。図1と図2は、アンケート調査の内容を一部示したものである。こうした傾向を研修の内容に反映していく必要がある。

ただ、本年度は試験的に研修を企画・実施したため、アンケートのサンプル数が少なく、研修に対する実態やニーズを把握するには課題が残る。本アンケートで集積したデータは、今後も継続して蓄積が必要である。それと共に、より詳しい口述（聴取）記録などからも、研修に対する実態や課題、期待などを考察していく必要もある。それらを通して、世代による学びの傾向を今後も量的・質的に分析すると共に、各世代のニーズに合った研修のあり方を検討していく。また、研修の内容を検討する上では、教科教育と教科専門の担当教員の更なる連携が不可欠である。参加者が、今後研修に期待することに応じていくためには、相互の連携を強化し、内容の充実を図る必要がある。

今後も引き続き、本年度分析した結果を基礎データとして、卒業生を対象とした教科の研修のあり方を継続的に検討していきたいと考えている。

（高橋智子）

若手

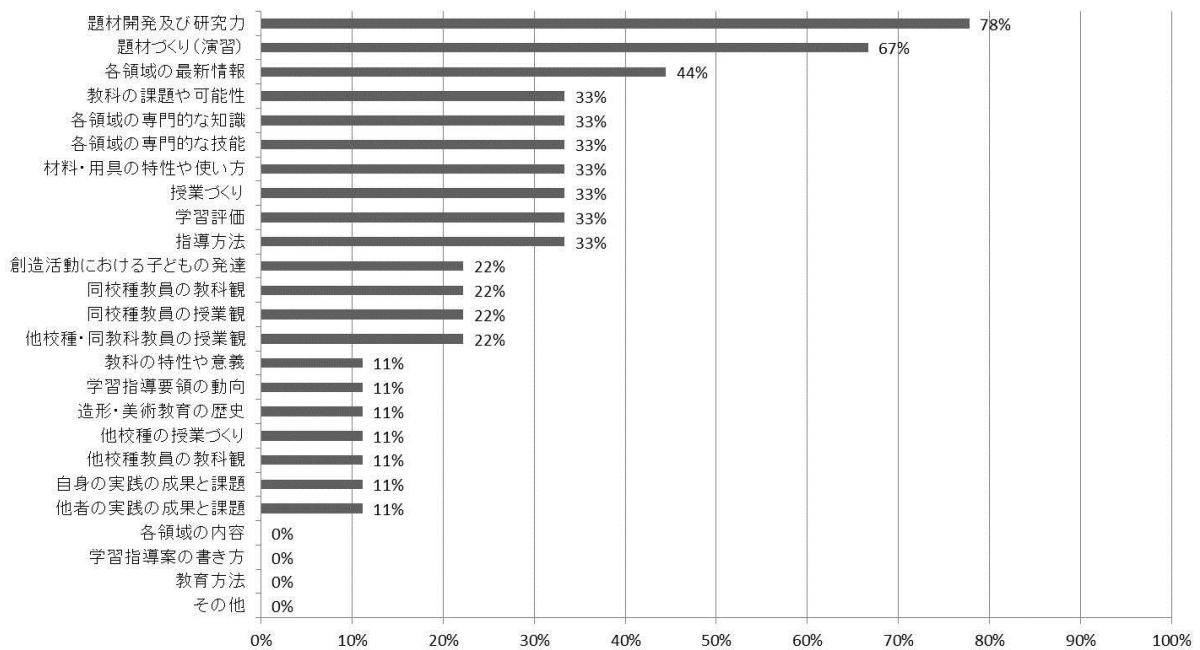


図1 本研修(研修全体)に期待すること(若手)

(n=9)

中堅以上

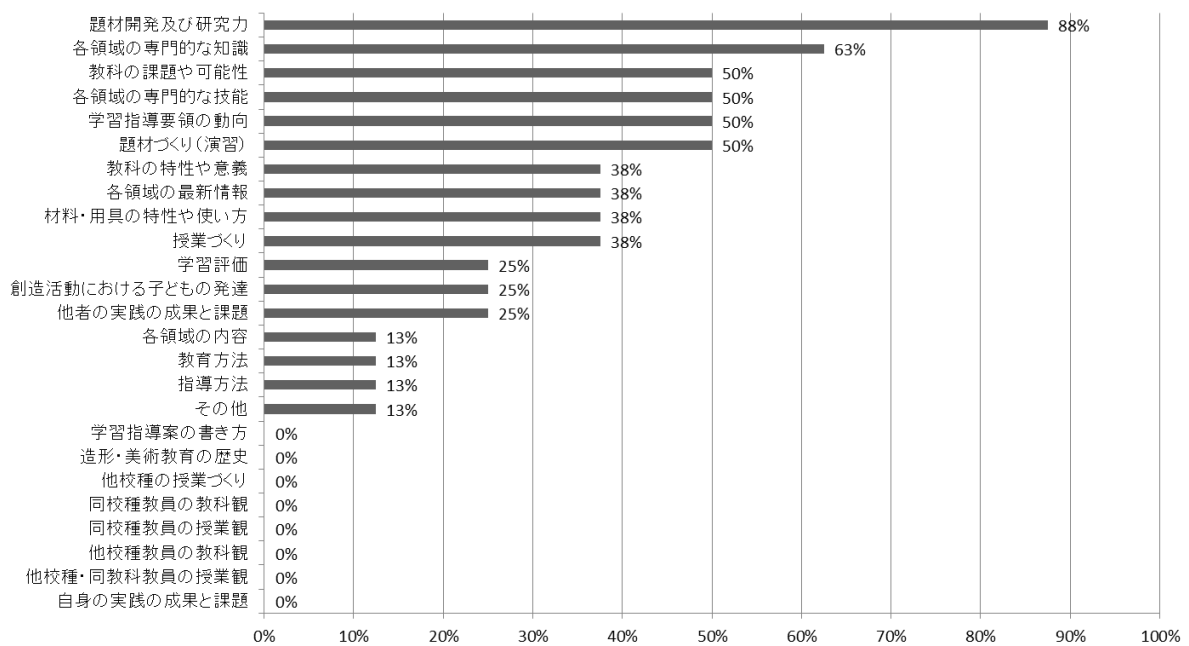


図2 本研修(研修全体)に期待すること(中堅以上)

(n=8)

註

- 1) 文部科学省 中央教育審議会 (2015) これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～ (答申) (中教審第 184 号)、平成 27 年 12 月 21 日
- 2) 文部科学省 国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議 (2017. 8. 29) 「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて一国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議報告書一」、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/077/gaiyou/1394996.htm
- 3) 文部科学省 初任者研修実施状況 (平成 28 年度) 調査結果<確定値>、http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kenshu/1396756.htm
- 4) 降旗孝「教育力向上のための教員研修の要素と内容：『図画工作科』の実践的な教育力向上を目指して」山形大学教職・教育実践研究 7、pp. 45-54、2012
- 5) 降旗孝「造形美術教育における教員研修システムの構築：図画工作・美術科の実践的な教育力向上を目指して」山形大学紀要 教育科学 15 (4)、pp. 53-66、2013
- 6) 隅敦「図画工作科に対する教科観の相違と教員養成の果たす役割 - 20 歳代と 50 歳代の現職教員対象の聞き取り調査をもとに -」美術科教育学 学会誌 36、pp. 223-238、2015
- 7) 正規採用の教員だけではなく、講師や非常勤講師なども含めた勤務年数とした。
- 8) SNS で情報を流した際、本学出身でない現職教員が強い参加の意思を示したため、受け入れた。全体の 6% (N=17)。
- 9) 過去の教員免許更新講習においては、教科教育と教科専門の教員が連携を行い、講習を計画することはこれまでもあった。
- 10) 自由記述欄のその他の記入は、以下の通りである。同校種、他校種の先生方と定期的に情報交換出来る機会があれば有り難い。/時間は 2 日程度でもよい/来年度以降もあれば、ぜひ参加させていただきたい。/現代の美術に関することと古来より受け継がれる美術や美意識に関することを学ばせていただければ幸いです。/図工についての実践を共有できる機会を広く持つことができたら素敵だと思います。公立校の先生方にも参加していただけるような機会になるといいかと思います。